

盲の天

長風叢書第二十八篇

歌集

盲の父

金子正男

古徑社刊

昭和四十七年九月二十日 発行

歌集 盲の父

著者 金子正男かね こ まさお

志木市本町二一―一―四八

発行者 鈴木十糸

発行所 古径社

浦和市元町二丁目二六番二三号
振替 東京 七二八五二番
電話 浦和 (86) 二三〇三

制作 新曜社

東京都豊島区池袋四ノ四〇一

定価 一、二〇〇円

目次

I 盲の父

鎖ひく犬	9	湯滝	28
鷺	12	芝桜	31
鮎	14	盲父	34
茄子の花	17	秋刀魚	37
その過ぎし日	20	結納	39
奔放の血	24	結婚祝い	42
蝮のきも	26	猫を叱る父	47

II

枇杷繁る	53	湯ヶ島	83
新しき日	56	霊のごときもの	85
妻の喜び	59	琴の糸	95
腹帯	61	二日の旅	97
みどり児	63	冬の竹群	100
雉鳩	65	凶弾	102
箴言	67	竹寺	105
花殻	78	梅雨晴るる	108
枇杷繁る	80	土用	110
酸漿の花		鳩笛	
砂丘			

III

母

朝顔の種

妻のしもやけ

家を建てる

壁の色

梅雨の頃

移り住む

雨の白骨

水を張る音

病み易く

風邪の父

142 139 137 135 133 131 128 124 121

113

半生

雪の下

廊下磨く父

庭苔

母

山の鴉

鈴虫

露繁き朝

鯉節

166 163 160 156 154 151 148 146

115

IV

あとがき	牡丹	蛙	木場 (Ⅱ)	木場 (Ⅰ)	啓蟄	新年	鴨	木場
------	----	---	-----------	-----------	----	----	---	----

211	189	186	180	178	175	173	171
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

推移	弟	枯菊	父と幼子	風鈴一つ	酷暑
----	---	----	------	------	----

208	205	202	199	195	191
-----	-----	-----	-----	-----	-----

盲の父

I
盲の
父

鎖ひく犬

木枯のしずまりし夕べ
帰り来て火鉢に寄れば炭
火が匂う

風一日^{ひとひ}ふきて乾ける土のうえ
犬が引きゆく鎖の
音す

吊皮の乱れ動くを見ておりぬ夜の電車に孤りとなりて

夜の雨に濡れて光れる砂利の道肌ぬくもろと思いつつゆく

朝鮮の訛りを持てる少年と並びて銭湯に髪を洗えり

墓間の道をゆくとき百舌の啼く鋭き声は空より
聞こゆ

し
金のことにかわりのなきさまにして盲い父眠
る帰りし部屋に

交尾せしあひるが水に浮きてゆく心奮ふるいて見て
いる吾か

鷺

一匹の泥鰯を食いし白鷺が顔を上げたり真面目なる顔

白鷺が歩み過ぎたる土のうえ音たてて少年の單車がゆきぬ

空に舞う鷺しなやかに見えながら風の吹くとき
風に真向かう

土湿る夕べとなりぬ飛び立ちし白鷺が空にただ
よいて浮く

田の上の空を飛びゆく白き鷺寒き夕べの部屋よ
り見ゆる

鮒

雨の日の部屋より見えて芝桜白く咲きいる庭に
濡れつつ

池の面に浮きいし鮒の沈むとき日のかげりゆく
ごとき思います